

## 批判的思考 (critical thinking)

羽山由美子\*

### I はじめに

最近、看護の分野では、批判的思考について言及されることが多くなってきた。特に、アメリカの看護教科書を見ると、各章の終わりにクリティカル・シンキング・エクササイズなるものがついていて、その章で学習した内容を批判的思考の観点から復習できるようになっている。また、看護診断の普及とともに、診断の思考過程を吟味し、かつ論理的に診断を考えられるようにしようと、批判的思考の教育が注目されている。

ここでは、批判的思考とは何を指すのか、看護教育および看護実践においてどのような意義があるのか、そして批判的思考についてのいくつかの論点を紹介したい。紹介にあたっては、看護分野では数種類の本が刊行されているが、そのなかでも最も包括的に扱っている M.A.Miller & D.E.Babcock 著の「Critical Thinking Applied to Nursing」(Mosby 社, 1996)を参考にした。

### II 批判的思考とは

批判的思考が論じられる背景には、まず1970年代後半から1980年代に盛んに

---

\* 聖路加看護大学

なってきたアメリカ合衆国における教育改革運動をあげることができる。批判的思考は、まさにこの教育改革運動の中心にあったといっても過言ではない。教育において、思考過程および思考技法を洗練させることは重要な課題である。また、複雑な現代社会にあつて個人が十全に機能するために、批判的に思考し吟味する力を養うことは、これからますます要求されてくることである。特に、アメリカ合衆国は多文化・多言語の社会であり、そうした社会では、個人がどのように考え、問題解決を図り、社会に貢献するかを認識することは、様々な意志決定に参画するためにも重要である。

批判的 (critical) という言葉は、ギリシャ語の *kritikos* から生じており、質問すること、納得のいく説明をすること、分析することを意味している。一般的に、批判的というと、相手をあげつらったり欠点を指摘するなど否定的なニュアンスが強いが、本来の意味においては、批判とは自己および他者の思考を吟味することを指す。

思考には、記憶・想起・理由づけ、そして信念や意見・判断をも含んでいる。また、思考することは、発見や創作、概念化などを含む創造的な過程でもある。人間の思考がどのように生じるのかはわからないが、思考の結果としてある行動が選びとられると、その結果は明らかに観察可能となる（その人がとった行動から何を意図していたか推測可能にもなる）。思考とは、複雑で多側面からなるダイナミックな過程であり、メンタル・イメージを作り上げる。

批判的に思考するということは、きわめて実際的な過程である。すなわち、同書の中で引用されている Chaffee が述べているように、「自己と他者の思考を注意深く吟味するための、積極的で、目的指向的、かつ組織化された認知の過程であり、それはわれわれの理解を向上させる」(p.7) のである。Miller と Babcock は、批判的思考の定義をいくつか吟味した後に、次のような定義を提出している。すなわち、批判的思考とは、目的指向的な思考法であり、議論の焦点・言葉・準拠・態度・前提・証拠・論証・結論・適用、そして正しいか正しくないか、その行為を行うか否かを意思決定するうえでの文脈、それらすべてを考慮することである、というのである。

### III 思考の洗練

人間が現実生活において思考するときには、思考する私と他者という二者の相互作用が存在することになる。そして、その二者は互いに多様な影響を及ぼしあいながら、二者間で、どのように世界を観るかという準拠枠あるいは観点をつくり上げ、その準拠枠はさらに他の人々とのあらゆる相互作用にも影響をもたらす。もし、ある人Aが共感的にもう一方のBの準拠枠に入り込むなら、AはBがどのようなことを考え、Bにとって人生とはどのようなことを意味するのか、Bを理解する能力をさらに高めるだろう。これは、他者が考えていることを、より正確に認知し、より思慮深く考え、十全に理解する力を高めることを意味している。

他者の考えを批判的に思考するためには、ある人の思考において、その人がどのような内的準拠枠をもって、どのような態度で、どのようなことを前提にして、そのように考えているのかを吟味することになる。

批判的思考の側面には、思考を洗練させるという側面もある。人間の思考には、様々なバイアスがかかることがある。そうしたバイアスという、日常生活のなかできわめて微妙な事柄は、どのように思考にかかわってくるか、識別していくことが重要である。

その際に、まず、個人とその人の考えは区別して考える必要がある。その人がどんなポジションにあらうが、その人にとって何がメリットにならうが、そういうこととは切り離して、その人の考えをそれ自体として吟味することである。それから、好き嫌いによる判断と理性的な判断も区別すること。好みも判断も個人の意見を構成するが、好みには根拠を要さなくとも、理性的な判断には根拠を必要とする。また、事実とその解釈も異なるものであると区別すること。選択による思考と、習慣的な思考を区別することも重要である。習慣による思考は、知的作業を伴うことはなく自動的に決まったパターンで考える。それに対し、熟考して判断するときには、論点を検証し意識的な決定をするわけ

で、選択に伴って時間を要するものである。

これは正しい、という思い込みは何に基づいているのであろうか。人々の思考に影響を及ぼす様々なバイアスを識別していくことは、思考の洗練と批判的思考の第一歩である。

#### IV 批判的思考と看護

批判的思考には、以上のような論理的・合理的側面とともに、創造的・直観的側面も含まれる。さらに、論証を進めていくうえでの技法も含まれる。ここでは、それらの細部には触れられなかった。また、データをどのように活用するかという問題もある。

看護との関連では、どのようなときに批判的思考が必要となるかということである。常に、あらゆる場面でそうした思考が要求されるわけではない。また、状況が異なれば、用いられる思考のスキルも異なることであろう。

批判的思考が要求される時というのは、何を信じ、どのように実行するか  
の意思決定が重要な局面においてである。あるいは、二者の価値観が相互作用に  
影響する場合、意味のとり方が異なる可能性のある場合などでも、批判的  
思考が必要とされるであろう。

たとえば、患者ケアにおいて、アセスメントからある判断を導き出すときに、  
批判的思考が必要とされるだろう。また、患者の健康問題にどのように介入す  
るかケアプランを立てるときにも、AというケアプランとBというプランでは、  
どちらが有効であるかなど決定する際にも批判的思考が必要とされる。

批判的思考の力を養うことが、看護教育においても臨床の場においても重要  
な意味をもってくるのである。